

## 6. アメリカで活躍する女医の率直な本音

*Thanks to our predecessors. We should continue changing and contributing to society for our successors.*

道を切り開いてくれた先輩方にありがとう。私たちもそれを引き継ぎ、後輩たちに貢献し社会還元しよう。

本音

トーク

### 1. アメリカにもある「女医あるあるバナ」

アメリカでも日本でも女医にはよくある話ですが、女性医師の場合、患者さんに医師と思われないことが多いです。一般的に患者の頭の中（特にお年寄りや田舎の）には「医師は白髪で、白衣を着た男性」というイメージがあり、特に若い女医は医師とみられず、病歴を取って診察し、さんざん検査や治療のプランを説明したあとに、目の前で電話に出られて「まだ医者を待ってるのよ～」とか、「お医者さんはまだですか」などといわれ、ズッコケることもよくあります。

また、ローテーションで回ってきているペーパーの男性医学生にベッドサイドティーチングをしていると、患者はペーパーの学生のほうばかりに目がいき、「先生、痛いので痛み止めをください」とか、「これが心配なんです」とか、ペーパーに相談したりして、そういうものに対して権限があるのは「このペーパーじゃなくて、私じゃ※」と思いながら耐えています。これは日本でもアメリカでも「女医あるあるバナ」かと思います（3章参照）

アメリカの場合は特に、ドクターだけでなく各医療職種がみんなスクラブを着ているため、「見分けがつきづらい」のが一因かもしれません。なので、一時期私は、本当は着ると邪魔な白衣を「医者っぽくみせるため」にわざと着ていました。ただ最近、私自身が歳をとったせいか、白衣を着なくてもそういったケースは少なくなった気がします。うれしいような…哀しいような…。